

「道は人に由りて弘まり、法は縁を待ちて顕わる」

福 島 光 哉

—
本日は大谷大学仏教学会の新入会員歓迎会を開催することになりました。ここにお集まりの皆さんは、主として仏教学科2回生の諸君であらうかと思いますが、今年度より仏教学会の会員として本格的な研究生活にはいられることは、私たちにとっても、喜ばしいかぎりであります。

一般に、どのような学問分野でありましても、共どもに学び合える同志を得ることは力強いことであり、嬉しいこととであります。けれども、私たち仏教学を学んで来た者にとりましては、心新たに仏教学を目指す若い皆さんをお迎えすることは、おそらく他の学問分野では味わえない程大きな喜びを感じているのであります。と言いますのは、皆さんが本学へ入学して仏教学を志すようになったのは、皆さんお一人おひとりが仏教の研究を目指す固い決意をもっておられるからに相違ありませんが、実は皆さんも気付いていないようなもつと大きな力強い働きにうながされて、仏教学科にお入りになったのだと思われるからなのです。皆さんがここに仏教学科を選んで来られた動機はさまざまでありましょうし、今後の自分の研究に託する期待もまちまちであらうかと思えます。そして仏教を学ぶということ、どこまでも自分自身の確立を目指すためであり、したがって常に主体的に仏教と取り組むことでなければなりません。

せん。しかし、同時にいま自分が立っているこの仏教研究の場というのは、私一人のちっぽけな決意だけではなく、目に見えない大きな願いというか、すこしオーバーな言い方をすると、皆さん一人ひとりにかけられた人類の期待を強く感じ取っていく場である、と言えると思うのです。これから本格的な研究を進めるにあたって、いま申しましたようなことを少しづつ感じ取って下されば、私たちの喜びもまた一入であります。以上のような気持ちをこめて、本日の歓迎会を開催する運びとなりました。

二

さて、本日の講題といたしまして、「道は人に由りて弘まり、法は縁を待ちて顕わる」というのを掲げました。これは6世紀の中国において活躍した僧祐という高僧が、『出三藏記集』という書物を書いておりますが、その序文中に書かれている文章の一節です。6世紀頃の中国は南北朝時代と言われ、黄河流域を中心とした北朝と長江流域を中心とした南朝とに分かれて、それぞれの文化を築いていました。仏教に関して申せば、中国に仏教が伝来して来た1～2世紀以後、次第に仏教研究や仏教信仰も深まり、南北朝時代も終りに近付いた6世紀には、中国独自の仏教思想がようやく確立しつつある状況であったと言えるでしょう。一口に「仏教思想の確立」と言いますが、その間には筆舌に尽くすことのできない多くの人たちの大変な努力の積み重ねがあったのです。インド・西域から、数多くの經典や論書などをもたらして来た人びと、そしてその經典や論書を漢文に翻訳した人びと、口頭で翻訳されたものを筆記していった人びと、そしてようやく出来上がった漢訳經典を研究し、經典の思想内容を仔細に検討して仏陀の精神を明らかにしようとした人びと等々……さらに単に經典の研究だけでなく、ここに説かれている教えにしたがって、自ら仏道を求めてひたすら修行に励んでいた人びと、そして仏教をわが命としてそれを人びとに伝えていった人びとなど、こういった数多くの人たちのさまざまな努力によって、しだいに中国の仏教思想として確立していった

のです。

僧祐の著わした『出三蔵記集』は、中国に仏教が伝来して以来、五百年たらずの間に翻訳され紹介された数かずの経典や論書を整理し、これらのリストを作って編纂したものです。現在残されている「経録」としては最も古いもので、仏教研究者たちには貴重な文献として、大切にされている書物の一つであります。皆さんもやがてこの難解な『出三蔵記集』のページをめくりながら、悪戦苦闘するときがあるかも知れません。

さて僧祐はこの『出三蔵記集』を編纂するにあたって序文を書いております。これを読みますと、この「経録」編纂の仕事を進めながら、僧祐は外国から伝わって来た仏教がわが中国人の心の中にしっかりと根をおろすにいたったことを、大きな感動をもって受けとめていたことがよく解ります。そして「道は人に由りて弘まり、法は縁を待ちて顕わる」という言葉を口ばしたのであります。ですからこの言葉の裏には、僧祐が仏典を通して仏教の精神に触れた喜びを、いっばいに顕わそうとしているように思われるのです。そこでつぎに、この言葉についてその意味するところを考えてみましょう。

まず最初の「道」というのは仏教、あるいは仏道のことです。ですから、仏教とか仏道というのは、仏教というものがあってひとりてに広まっていくものではない。社会の中に仏教が広まるのは、仏道を身につけた人間のたらしき、活動によってである。ほかならぬ「人間」が伝えるのである、ということを言いたかったに違いありません。ですから生身の人間に仏教が生きて働いているかどうか、そこにこそ仏教が広まる大切な要素があるんだ、ということになるのでしょうか。「法は縁を待ちて顕わる」というのも、同じような内容を表したものと考えられます。ただ前半の「道は人に由りて弘まる」という表現は、中国の古典であります『論語』の言葉を下敷きにしておりまして、『論語』によりますと「人はよく道を弘める。道が人に弘まるのではない」という意味の言葉があります。この当時の仏教者は、しばしば自分たち中国人にとって固有の教えであります孔子や老子・荘子などの名言・聖句を使用して

おります。むしろ中国のある時期は、中国固有の思想を表す言葉や文章をもって、いかに仏教思想を明らかにできるかが、大変重要な意味をもっていたのです。ただ今の場合は、さきに中国の古典に則り「道は人に由りて……」と言いつづいて「法は縁を待ちて……」と仏教的な表現をもって、じつは同じ意味をそれによって強調しようとしていることがわかります。

さてそれでは、上のことばによって私たちは何を学ぶことができるでしょうか。そのことを考えるための材料として、一つのエピソードを皆さんに紹介することにしたしましょう。それは、これも中国の話になりますが、4世紀末から5世紀初めにかけて活躍した有名な人に竺道生という人があります。この人は中国の仏教が中国の土壌に根付いていった5世紀以後の仏教思想にとって、忘れることのできない優れた業績を残していった人ですが、この竺道生に關するお話です。彼が活躍した5世紀の初め頃、嚴密にいうと421年、『大般涅槃經』という40卷からなる龐大な經典が漢訳されて、このお経が初めて中国に紹介されました。ところが、この『大般涅槃經』が翻譯される少し前に『大般泥洹經』という6巻の經典が漢訳されていて、とくに南朝の仏教者の間では広く研究され親しまれていたのです。この6巻本の『大般泥洹經』というのは、実は40巻本の初めの方の一部に相当するのですが、漢訳の時代も漢訳者も異なりますから、この二つの經典の文章は決して一致しておりません。しかしこの兩經典ともに「如来は常住なり」とか、「一切衆生、悉く仏性有り」といった重要な思想は、繰返し説かれておりますし、その他ここに説かれている物語、文章の流れなどからいっても、この二つの經典それぞれの原典は共通するものであったろうことは、容易に推測することができるのです。以上のような『大般涅槃經』と『大般泥洹經』との関係を前提にして、竺道生のお話を進めることにいたしましょう。

竺道生は、今の南京のあたり、当時「建康」と呼ばれていた南朝の都において活躍しておりました。そのころ仏教は、建康において大いに栄え多くの仏教学者を輩出していました。竺道生はその中の一人だったので。そして彼は

漢訳されたばかりの『大般泥洹經』を、他の仏教学者と共に熱心に研究いたしました。先に申しましたように、『大般泥洹經』には「一切衆生、悉く仏性有り」ということが、力強く主張されており、この言葉の意味は、すべての生きものには、間違ひなく仏になる性質、或いは仏になる可能性とでもいべき「仏性」がある、ということでありましょう。言い換えると、われわれ衆生はすべて必ず仏に成れるのだ、という主張でありますし、すべての人が必ず仏の悟りに至るものを内に秘めているという事を説いているのであります。ところが『大般泥洹經』にはこのような「悉有仏性」を説いた後に、続いて「但し一闍提を除く」と説かれているのです。ここに「一闍提 (icchantika)」というのは、仏法を誹謗したり信じない者のことで、『大般泥洹經』においては、「悉有仏性」とはいつでも仏教と敵対して誇り、どうしても仏法を信じられない悪人は仏になれない、したがって「一闍提」だけは成仏できないのだと主張しているように読めるのです。事実当時の南朝の仏教研究者たちは、すべての衆生には仏性があってやがて成仏して悟りに至るけれども、一闍提だけは悟りに至ることはない、成仏できないのだと了解していたのです。しかし竺道生は、「そうではない、仏陀の本当の心からすれば、この一闍提も必ず仏になれるのだ」ということを強く主張いたしました。このように彼は經典の説に相反することを主張いたしましたので、建康の学僧たちから「けしからん奴だ」と厳しく批判されることになりました。そのため、竺道生はとうとう都・建康から追われて、西の方の廬山という名山に籠もり、華やかな都を出てひっそりと山中で暮らすことになってしまったのです。

しかしこのように竺道生が、南朝にあって問題を投げかけてから間もなく、北涼（今の甘肅省）において先程申しました『大般涅槃經』という大部な經典が翻訳されました。そしてやがて、この經典が南朝にも伝えられ、建康の仏教学者たちも競ってこの『大般涅槃經』を研究するようになりました。そこで建康の人たちは大変なことを発見することになったのです。『大般涅槃經』は40巻もある經典ですから、ここに説かれている内容も随分複雑で、一義的に押さえることはとても難しいんです。しかしこの『大般涅槃經』は代表的な大乘經典の一つであって、非常に大切な

仏教の精神をさまざまな角度から明らかにしておりますので、是非しっかりと研究していただきたいと思えます。皆さんの先輩の人たちの中に、この經典を卒業論文の研究テーマに選んだ人も少なくありません。

さてこの『大般涅槃經』によりますと、前半の部分には『大般泥洹經』と同じように、「一切衆生、悉有仏性」ではあるけれども、「但し一闍提は除く」と説かれております。ところが後半にいたって、いわゆる「一闍提」の問題をめぐって深く追求されるようになり、やがて新しい一つの結論として「一闍提」も実は仏に成れるのだと主張されるに至るのです。かつて6巻の『大般泥洹經』の所説にないこと、むしろ相反することを主張したと言って、竺道生を非難した人びとにとっては、この新来の『大般涅槃經』が説いているような一闍提も成仏できるとする經説は、大変な驚きであったに違いありません。と同時に『大般涅槃經』を全く知らなかった竺道生が、『大般泥洹經』のみによって、すでに仏の真意を汲み取っていたことに、当時の仏教学者はこそぞって感嘆したに相違ありません。

三

ただいまは、竺道生の涅槃經研究にまつわるエピソードを紹介いたしました。そこでつぎに、このエピソードのもたらす意味について考えてみたいと思います。

中国では、老子のころからしばしば言われていた名言に「得意忘言」というのがあります。これは「意」すなわち言わんとする心意、意図がわかれば、「言」すなわち言葉や表現は忘れてもいい、ということでしょう。言い換えれば、文字や文章で表現されたものは、その表現の奥に隠されている深い意味を汲み取れば、言葉や文字を捨ててもいい、ということなのです。私たちにあって「忘れる」という言葉は、「忘れ物をする」とか「物忘れがひどくなつた」とかいう具合に、「忘」という文字はあまりいい意味では使われないうです。ところが中国の古典ではさらに、握っていたものを放す、固執していたものから解放される、といったような積極的な意味をも持っている言葉な

のです。大変面白い言葉の使い方だなと思います。

いまここに「得意忘言」という中国の古い言葉を紹介したのは、竺道生について考えてみるときに、よく当てはまる言葉だと思われるからです。先に申しましたように、竺道生は『大般泥洹經』を研究して、しかもこの經典には書かれていないこと、むしろ相反することを主張して多くの人びとの響譽を買いました。このように竺道生が經典にないこと、反逆するようなことをどうして主張したのでしょうか。そこで一つ考えられることは、彼の『大般泥洹經』にたいする研究態度、經典に向かう姿勢について、当時の多くの仏教学者たちと大きな隔たりがあったのではないかと、ということであります。

竺道生という人は単なる仏教学者というよりも、類まれな求道者でもありました。彼は『大般泥洹經』を手にしたとき、これを徹底的に読みこなしていきました。恐らく、この經典の一字一句に周到な注意を払い、懸命になって經說の意味やところを追求したことでしょう。ですから竺道生は『大般泥洹經』の6卷すべての文字にこだわり、すべての文章にこだわって、暗記するくらいにまで読みきったのではないかと思われまます。けれども竺道生の研究目標は、たんに經典の文章を解釈して經說の筋書きを明らかにするだけではなく、經典の奥にひそんでいる仏陀自身の心に迫ろうとするところに置かれていたのです。そして竺道生自身の求道上の課題に対して『大般泥洹經』が応えてくれるものは何であるかを、ひたすら探っていたのです。そしてやがて、この經典には「但し一闡提は除く」と説かれているが、実は一闡提も必ず仏に成れるのだという「仏意」の頭れであるという、確信に満ちた結論に到達したのであります。ここまでに到ったとき、すでに竺道生の頭の中には『大般泥洹經』の文字や文章は「忘れて」いたのではないのでしょうか。このエピソードは『大般泥洹經』に書かれていない一闡提成仏の可能性を、竺道生は敢えて主張し、しかもその正当性が竺道生の知らない『大般涅槃經』によって後に証明された、という逸話であります。しかしこの中から、今まで述べてきましたように、まさしく「得意忘言」に当てはまるような竺道生の經典研究の精神

を学ぶことができると思います。そしてまた僧祐が「道は人に由りて弘まる」といったのは、經典を介して『竺道生』という『人』が仏法を弘めることを指しているのでしょう。

四

「仏法を弘めたのは決して竺道生一人ではありません。数限りない多くの仏法求道者たちの努力によって、今日私たちに「生きた仏教」として心を揺り動かしてくれるのです。ですから仏教は、いまここで私たちが考えているような、あるいは思いついたようなちっぽけな教えではありません。これから本格的な仏教研究に進もうとしておられる皆さんに、そういった仏教的な人間のありようとか、仏教のものの見方などについて、少し紹介してみようと思います。

『華嚴経』というよく知られているお経があります。釈尊が今日のブッダガヤ付近において成道されたことは、皆さんもご承知でしょう。そのブッダガヤという場所は、聞くところによると記念の仏塔が建てられ、周辺には観光客目当ての物売りがいて、決して「仏陀成道」という崇高で厳肅な風景ではない、むしろ何の変哲もないところだそうです。『華嚴経』が説かれた時も同じように、ごく有りふれた普通の野原か公園のようなものであったでしょう。ところがこの何の変哲もない処が、『華嚴経』によりますと、悟りをお開きになった仏陀釈尊の眼には、このあたり一面、絢爛と輝きわたる美しい風景となって映ったというのです。そして周辺の草や木には、それぞれ仏さまが座っておいになり、静かに合掌しておられる、と説かれています。このように、自然の中にある草木や岩石の一つひとつに仏さまを見ることができると、という眼が備わる、つまり世界のどこにあってでも仏さまのところが伝わって来ると実感できる、という智慧が開かれてくると言うのです。

『華嚴経』は、一人ひとりの人間に物事がどのように見えるか、その人にどのような眼が備わっているかによって、仏教の世界が開かれてくるのだということを、私たちに教えてくれるように思われます。京都にはたくさんのお寺が

あります。お寺には立派な伽藍や仏像・庭園があります。これらの寺院・仏閣にふれて、そこに生きた仏さまに遇う喜びを是非感じとってほしいと思います。

話はかわりますが、今のアフガニスタンの首都カブルからバスで約7時間のところにバミアンというところがあります。バミアンは広い砂漠の中にある美しい緑をたたえたオアシスであります。2〜3世紀頃、そこには多くの岩をくり抜いた修行場と共に、巨大な仏像が二体建造されました。中でも大きい方は50メートル余りもある立像です。そしてこの仏さまの顔は殆ど削り取られて、無残なお姿になってしまっていますが、この大きな仏さまの前にはたずむと、ちっぼけな自分の姿にあらためて嘆息するばかりです。と同時にこんな「大地の果て」とも思えるきびしい自然環境にあって、長い月日にわたって造りあげられた仏さまを思い、千数百年のあいだ聳えたったままの仏像を思いますと、とても言葉にならない感動がわいてまいります。また、中国の西方、正しく辺境の地に敦煌というところがありますが、そこへ行きますと、先程と同じような感慨を懐きます。昔ここには砂嵐の舞う真っ只中に、たくさん の 經典や仏像・仏画が隠匿され保存されておりました。そして、政権が交替し王朝の興亡が相次ぐ歴史の真っ只中 にあって、仏法だけは不滅であることを深く信じた仏教者が、命がけて護持してきた努力と強い精神にふれて、深い 感銘をおぼえます。

そしてまた、このような荒涼とした砂漠の果てしない広がりの中に、忽然と聳える仏像や仏塔に圧倒されて、仏教の大きさというか、単に空間的な広がりを用いのでなくて人間の「こころ」の大きさをも強く感じるのです。お経には、「三千大千世界」とか「無量無辺阿僧祇劫」などと、とてもない大きな数字をよく見かけますが、これらは単なる誇張ではなく、むしろ実感のこもった大きな世界が思索されているからこそ、自然にこのような表現となったのではないかと思えます。

仏教学に身をゆだね、仏教の真理を探求しようとなさる皆さんにとって、仏教は自己自身を学ぶためのものであり

ます。ですから、真剣に学べば学ほど厳しい緊張感を張りつめながら、ときにはとげとげしい表情になってしまうこともあるでしょう。けれども仏教というものは、同時に雄大な世界観、人間観をもってこの小さな私をやわらかく包み込んでくれるものでもあるのです。ひとつ皆さんは、狭い下宿の片隅に大の字に寝そべて、広い世界に思いをめぐらせ、わが「こころ」を广大無辺の境界に遊ばせてください。そして私の人生は私一人のものではなく、世界中の人びとや地球上のあらゆる自然と共にあることを、思い起こしてください。

このたび、皆さんを大谷大学仏教学会にお迎えするにあり、共に学び合える同志を得た喜びの一端を申し上げます、本日の講演を終わらせていただきます。